

真夏の追憶行

横松和平太

今年(2012)の晩夏は、北信越地方へ旅することにした。越中八尾^{やつお}の風の盆の雰囲気を一
度味わって見たかった。三年に一度開催される越後妻有^{つまり}大地の芸術祭も再訪したかった。
北信濃では柏原の一茶記念館にも足を運びたかった。初日は富山市、二日目は松之山温泉、
三日目は飯山市に宿をとり、上越新幹線、ほくほく線、北陸本線、高山本線、飯山線、信
越線、長野新幹線を乗り継いでのひとり旅である。大人の休日倶楽部パスがあればこそ
3泊4日であった。

越中おわら風の盆

この祭りは、越中八尾おわら風の盆として有名かつ超人気のイベントだ。毎年9月1・
2・3の三日目間、人口約2万人の町に20万人もの観光客が訪れるという。宿をとるのも大
変だと聞いていた。正攻法は諦めて頭を捻った。調べてみると前夜祭なるイベントがある
という。観光会館を会場に有料だが8月30日の夕刻風の盆のステージがあることがわかっ
た。どうせ祭りの当日は人で溢れかえって風情を楽しめないだろうし、ここは富山駅前に
宿をとって越中八尾まで行ってみることに。夕刻まで時間もあることなので、富山港近く
の岩瀬の廻船問屋群のある街並みを歩いてみることに。岩瀬浜までポートルムなるライト
レールに乗ってみた。ヨーロッパの都市でよく見かける乗り物だが、斬新なデザインとエ
コ&バリアフリーな路面電車である。おまけに可愛いガイドさんの案内まであった。お勧
めである。岩瀬は日本海と神通川の河口に面しており、北前船のみなと町、北国街道の宿
場町として繁盛した地である。国指定重要文化財の森家を見学した。岩瀬浜辺りを歩いて
目立ったのは、案内板の文字であった。英語、ハングル語のみならず中国語簡体字、さら
にロシア語キリル文字まであった。まさしく環日本海を感じさせられた。そういえば、富
山を中心に南北を逆転させた地図も売っていた。北陸は環日本海を中心なのだ。

越中八尾という町は河岸段丘の尾根上ある坂の町だった。和紙と養蚕で栄え、財をな
したという古い屋並みや通りも残る、歴史と文化の蓄積を感じさせる町でもあった。
前夜祭のステージはビデオ上映と盆踊りの実演と踊り方指南という、たわいもないもので
あった。だが、夜の街並みを歩いてみると思いのほか風情のある光景に出くわした。
古い^{たたず}佇まいの屋並から、三味線、胡弓、太鼓の哀愁を帯びた気品ある調べや唄が聞こえて
きたのだ。祭りの本番に備えてあちこちの屋内の稽古場や広場で練習をしているのだった。
町流しの踊りも見ることができた。烏追い笠で顔を隠した男女の踊り手達が優雅である。
阿波踊りの動に対する風の盆の静である。実に風情があった。魅了されそして堪能でき
た。雑踏もなく、祭り当日を外した狙いは間違いでなかったのだ。

風の盆の由来や歴史をみると、ルーツは310年前にあるらしい。元禄15年(1702)と
いうから赤穂浪士の討入り事件の年だ。資料によれば、その由来は三月の春祭りの三日間、

或る慶事を祝う無礼講が始まりという。歌舞音曲に和して昼夜の別なく町内を仮装して練り廻った。春祭りが盂蘭盆三日間に変わり、やがて二百十日の風の厄日に豊穰を祈る三日間に変わり、風の盆と呼ばれるようになった、という。今日のような踊りや唄になったのは昭和初期というから90年も経っていないことになる。意外と最近のことなのだ。

風の盆を私が知ることになったのは高橋治の小説『風の盆恋歌』(1985)だし、テレビドラマ「越中おわら風の盆」(1988)そして石川さゆりの歌謡曲(1989)の影響大であろう。

越後妻有 大地の芸術祭

大地の芸術祭は越後妻有地区(新潟県十日町市・津南町)を舞台に2000年から3年に一度開催されている大規模な国際芸術祭である。今年は越後妻有アートトリエンナーレ2012と題し、7月から9月にかけて夏の里山一帯に約360点もの現代アートの作品が常設、特設で展示された。広大なエリアであるし、毎回新たな作品が加わるのでとても一回では体感することが出来ない。普段ならあまり人がやって来ない時期と空間を舞台にした、ユニークな地域起こしイベントである。プロデューサーは北川フラム氏、あの北川良寛と呼ばれた良寛研究家の息子である。近年は瀬戸内国際芸術祭にも携わっている。以前に一度十日町市を中心にした北部エリアを見て廻ったことがあった。今回は、かつての松之山町(現在は十日町市に合併)と津南町エリアを見て廻ることにした。松之山温泉に行くには、自家用車以外ならば、ほくほく線のまつだい駅から本数は少ないが温泉行きの路線バスしかない。もっとも大地の芸術祭の期間中には、数多くの臨時バスが運行されている。旅のもう一つの目的である学生時代の旅にまつわる記憶の修復をしてみたかったのである。里山を歩きながらの追憶行をしてみたかったのだ。目的地は松之山町中尾・東川である。ここに昭和40年(1965)の年末から翌年の正月にかけて滞在したことがあったからだ。そこには翌日訪れることにし、8月31日先ずは、ほくほく線まつだい駅に降り立った。この路線1968年に着工し、1997年に開通している。昭和40年当時、影はあったが形はなかったのだ。

駅からは路線バスに乗り境松へ。バス停から20分ほど炎天下のもと車道をたどり、森の学校キョロ口へ。里山科学館というだけあって、里山の植物・動物などの自然観察、体験ができる拠点となっている。ここに芸術祭参加のアート作品も加わっている。この施設自体が第2回の芸術祭参加作品なのだ。キョロ口のすぐそばには、キョロ口の森があり、美人林と呼ばれるブナ林もある。樹齢約80年程のスラリとした立ち姿の美しさが売りだ。

松之山の中心に出て、次は坂口安吾ゆかりの大棟山美術博物館を訪ねてみた。名前は大仰だが、この地で700年近い歴史を持つ村山家旧宅と庭のことである。村山家は豪農で庄屋、造り酒屋であった。坂口安吾は新潟市の出身、実家は代々の大地主で旧家である。彼の叔母や姉がこの村山家に嫁いでいたという縁で、青春時代の昭和初年の頃夏休みによく遊びに来て滞在したということだ。安吾の作品は若い頃『墮落論』など読んだものだ。館内には安吾ゆかりの遺品もあるが、殆どは金持ちの旧家が集めた書画骨董品類であった。人が訪れている形跡があまりなく、やや寂れている佇まいが良いといえば良い。

そこからは、かつて安吾も散歩して歩いたかも知れない田舎の車道を松之山温泉まで歩くことにした。約2時間かかって真夏の峠越えとなった。温泉地に入る手前には安吾岩なる立札があった。彼の小品『逃げたい心』(1935)の一節に因むものらしいが、奇岩なのかどうかよくわからないただの崖でしかなかった。集落に入ってすぐに「夢の家」というアート作品があった。古い民家を改装した不思議な空間を創り出している。ここに泊まり、特製の服を着て眠り、見た夢を「夢の本」に綴ることが出来るという。夢体験まで作品にしておこうという作品なのだ。が、その日の泊まりは「明星」という民宿を予約していた。いわゆる温泉街からは外れてはいるが、開湯約700年という歴史のある日本三大薬湯と呼ばれる温泉に入った。因みに他の二つは有馬・草津らしい。鹿塩温泉ではないがここも塩分が強い湯で昔は塩の採取もしたという。説明書によれば、1200万年前の海水が地殻に閉じ込められ、マグマによって温められて地層の断裂から湧出しているものとか。温泉地にはいくつかアート作品があった。いずれも屋外のオブジェである。同宿者には女性が多かった。4人組の名古屋の女子大生もいたが、彼女たちはレンタカーと列車を使って大地の芸術祭を楽しんでいた。翌日の列車で再び遭遇したが、会話が弾むような展開とはならなかった。当然といえば当然だ。翌朝民宿を旅立ち、里山を越え、歩いて中尾集落に向かい約一時間半で到着した。ここに来たのには大きな目的があった。

昭和40年(1965)・松之山豪雪キャンプ

大学1年の冬休みに2年生のK先輩が企画した豪雪行に参加した記憶があった。年末から正月にかけて、日本一の豪雪地帯の村で越年キャンプをしよう、というふれこみだったと思う。参加したのは私の他には1年生が2名、H君とF嬢、合わせて4名のパーティーだった。ここで貴重な体験をさせて頂いたのだった。その思い出の地を今一度訪ねてみたかった。あれから何がどう変わり、何が残り、何が消えたのか？を確かめてみたかったのだ。私のおぼろげな記憶を辿りつつ、最近入手出来たK先輩の貴重な記録(よくも保存されていたものだ)の助けを借り、その旅を再構築してみたい。

その記録によれば、名古屋出発は12月28日とある。23:55発の夜行準急「きそ」に乗ったようだ。そう言えば当時はよく夜行便を使った。名古屋駅の西口近くにザックを置いて駅裏に買出しによく出かけたものだ。

翌29日の10:32に越後外丸^{とまる}駅に着き、15:05外丸中学校到着 テント設営、泊とある。私には、初日の昼頃に駅に着き、昼食を食べに大きな橋を渡って食堂に行ったこと、カツ丼がおいしかったことしか記憶がない。

越後外丸駅は昭和43年(1968)に津南^{つなん}駅と改称されたが健在である。駅舎は勿論建て替えられているはずだ。外丸中学校で写したらしい写真はあるが、実は記憶はまるでない。25kg以上はありそうな大きなザックを背負い、雪で泥々の国道を歩く写真も残っている。

記録によれば、翌日30日 10:10に出発し11:30から15分間ジープに便乗とある。この前後の時間帯に写された姿かも知れないが、ほとんど記憶がない。12:30に東川小学校着。

津南町から松之山の東川、中尾といった集落には当時豊原峠を越えるバス路線があった。但し冬期は不通となり除雪もされず、ただ圧雪されていただけだった、と聞いた。まさしく陸の孤島だった。ジープを降りてから45分で到着しているところからみると、果たして歩いて峠を越えたのだろうか？記憶がない。天候はどんよりした曇り空だったと思う。

校庭にテントを設営させて頂いたのだが、当日から大雪になった。これは憶えがある。翌日の大晦日は、近くの中尾集落にある松山鏡の伝説の地である鏡ヶ池を見物に出かけた。出発したのは13:45と記録にあった。14:20 中尾集落に到着したらしい。前日来の大雪の降る中であつた。その時集落の中で藁ぐつに蓑笠を被ったおばさんに声をかけられた光景を憶えている。「あなたらどこに行くのか？、どこに泊まっているのか？」などと会話するうち、「この大雪の中テントで泊まるのは大変だ、私の家に止まりなさい」ということになった。図々しくも私たちはその好意に甘えさせて頂くことになった。高橋伝三郎さんというお宅であつた。ご夫婦にまだ高校生位の娘さん、それに夕方十日町から帰省してこられたお姉さんの四人家族。そこへ私たち四人が加わつての大晦日となつた。まだ白黒テレビの時代だったがNHKの大河ドラマが放映されていたシーンが記憶に残っている。緒形拳主演の「太閤記」だつたような気がした。調べてみるとこの年は確かにそうだったが、放映最終日は12/26だつた。すると大晦日に総集編でも放映されていたのを見たのかも。平均視聴率31.2%と資料にあつた。大河ドラマの黄金時代であつた。今の「平清盛」からみれば隔世の感がする。明けて昭和41年(1966)のお正月にはお雑煮をご馳走になつた。兎肉が入つていたのをよく憶えている。本当にお世話になりました。その後十年以上は毎年賀状を出していたように記憶している。10:25 高橋氏宅を出発し11:00東川小学校着と記録にはあつた。テントは前夜のドカ雪で埋まっていた。やむなくテント泊を諦め、小学校の講堂に避難することに。今度は宿直の先生にお世話になつた。

1月2日、この日のことはまるで記憶がないのだが、記録にはこうあつた。

11:25 東川小学校発、12:45 降雪と立松の脚の痙攣のため東川へのバック開始
13:30 東川小学校着。

都合の悪いことは忘れてくれるものらしい、記憶というものは。

結局、翌3日に帰ることになつたらしい。12:05 出発 13:50 豊原峠 15:30 越後鹿渡駅着
この日は快晴となり、快適な雪道だつた気がする。先生が途中まで見送りがてら共に歩いてくださったような記憶があるのだが、どうであろうか。

翌4日 早朝 4:44 名古屋駅着 で記録は終つていた。

当時の部誌「道祖神」(第5号)によれば、昭和40年(1965)12/30から1/3の5日間とあるが実は、車中泊2日を入れて8日間の旅だつたということだ。

往復に使つた列車関係につき、古い時刻表とかネットの資料により確かめてみたところおそらくこうだつたのだろう。本当に当時は時間もかかり不便だつたのだ。

(往路) 名古屋 23:55発の夜行準急「きそ」長野6:26着、長野発7:16の飯山線で戸狩で乗換え、10:32 越後外丸着。

(復路) 越後鹿渡駅 15:43発、飯山線で長野着17:55、長野発22:00頃発の臨時夜行便か。

2012年・大地の芸術祭の里

あの豪雪行から47年は経つ今年の夏、中尾集落を再訪してみることにした。9月1日朝8時前から歩き始め、9時半頃に中尾の集落についた。何はさて置きお世話になった高橋家を探した。あのご両親はもうおられないであろうとは思ったが、家のあった辺りを訪ね歩いてみた。季節が豪雪の真冬と真夏ではまるで違うのでわかりづらいのは言うまでもないのだが、なかなかそれとおぼしき家が見当たらない。人に聞いてみようと思ったのだが、人そのものを見かけない。全く静かな農村だ。でも、やっと人影を見つけることができた。ある屋敷側^{そば}の畑で作業中のお婆さんがおられたので、高橋伝三郎家のことを尋ねてみた。

すると、すぐ隣の敷地が伝三郎さんの屋敷跡だとおっしゃった。屋敷は既に無く、倉庫や作業場になっていた。道向こうの戸長さんが土地を預かり管理されておられるとか。

ご家族の消息を伺ってみた。伝三郎さんご夫妻はやはりとうに亡くなられていた。伝三郎さんは、山を南に越した津南町から婿にこられた方だったとか。松之山町の昔の広報紙を調べてみたら、大正2年(1913)生まれ、私たちがお世話になった頃は52歳、戸長をなさっていたようだ。私たちに声をかけてくださったお母さんは、しっかり者だったとか。娘さんが4人おられたようで、末娘は昭和24年生まれのはずだとか。とすれば、あの時おられたお二人は下の娘さんだったことになる。娘さん達は、新潟県内や東京方面で全員健在だと。お墓でもあればお参りさせていただこうと思ったが、移設されもうここには無いとのことだった。あのお正月に兎肉入りのお雑煮をご馳走になった思い出を話したところ、当時はどの農家でも兔を飼っていて、お正月等にご馳走として振る舞われたものだったとか。兔を屠殺する専門の人がやってきたものだという。調べてみたらこうした人は屠殺の報酬として毛皮を貰えたらしい。当時は単純に山で猟をして獲った兎だろう位に考えていたことが恥ずかしくなった。飼い兔ならば、昨日まで可愛がっていた兎をご馳走になった訳だ

当時は90戸近くあった家も今では16戸だという。2004年の中越地震で地滑り被害にもあったようだ。昔から地滑りが多かった地域のようなのだ。

伝説の鏡ヶ池に行ってみることにした。あの時は豪雪で近寄れなかったのだが、今は小公園として整備されていた。何ということはない小さな水溜りのような池であった。そのすぐ裏山には十二神社という社があった。K先輩達が前年にテントを貼られた所という。神社の境内には今回の大地の芸術祭のアート作品があった。題は「FLOWERS」。緑の草で一杯の敷地に点々と真っ黄色の大きな花卉(樹脂製)が散りばめられ、真夏の木洩れ日の中、鮮やかな空間として演出されていた。

中尾からゆるゆると道を下って行くと、東川小学校らしき建物が見えて来た。といっても今は廃校となっている。当時テントを張り豪雪で潰された校庭には夏草が茂っていた。校舎は当時の木造校舎ではなく、外観は鉄筋コンクリート製の廃校舎だった。だが今は、大地の芸術祭のアート作品として生かされている。「最後の教室」(C・ボルダンスキー+J・カルマン2006年作)として校舎の中が常設のインスタレーション空間として演出されていた。受付にはボランティアらしい若い女性とお爺さん。聞けばかつての卒業生とのこと。

昔の木造校舎のデザインがとても良かったと。往時の写真もあるが、同感である。芸術祭巡りの若いカップルや家族連れがひっきりなしにやってくる。確実に村起しになっている。校門の石柱には、昭和50年・創立100周年記念の文字。明治8年(1875)創立らしい。廃校になったのは、資料によれば昭和51年(1986)だった。つまり101年目のことだ。木造校舎がいつ幻となったのか、は分からなかった。

坂口安吾は松之山、中尾にも来ていた。先の小品によれば、松之山温泉へ外丸駅から円タクと同じガタガタのフォードの乗合自動車に乗り、車1台通れるだけの断崖絶壁、九十九折の山路をうねってやってきた、と表現している。昭和初年(1930年頃)はこうだったのであろう。この路線の詳細はよくわからないが、手元にある昭和33年発行の五万分の一の地図をみると、樽田、天水島経由で松之山温泉の路が幹線のようにも思える。私たちは豊原峠越えの道を歩いたのだが、昭和56年(1981)には豊原トンネルが開通している。田中角栄が列島改造論をブチ上げたのが1972年のことだから、その成果なのだろう。トンネルができて便利になって、皮肉なことに人々は都会に流出し、過疎が進んだ。峠越えのかつてのバス路線は2002年には廃止となり今はない。

東川から越後鹿渡^{えちごしかわたり}駅まで、あの時は峠越えの雪道を約3時間半かかって歩いている。峠越えの旧道がまだあったが、地元の話ではやめた方がよいとのこと。今回は真夏の炎天下、車がビュンビュン走る国道をトンネルを抜け歩き続けた。途中、「上蝦池^{かみえびいけ}名画館」という今回の芸術祭参加の美術館に寄ってみた。会場は集落の元共同農作業所。ミレーとかフェルメールといった西欧の名画と重なる風景をこの集落の風景に捜し、写真で記録し生活・文化・自然を考えてみようという面白いアートプロジェクトだった。この寄り道があっても約2時間で駅に到着した。

当時の貴重な記録を提供して頂いた当のK先輩だが、昔の豪雪行を振り返って曰く。

「高橋さん宅にすっかりお世話になったこと、二人の娘さんが美人だったこと、テントが雪ですっぽり埋まっていたことなどの記憶はしっかりしていますが、最初に外丸中学校に泊まったこと、ジープに便乗したこと、東川小学校に一度戻ったことなどはほとんど記憶にありません。この年齢になると記憶ではなく記録しか頼るものがありません。」

至言ではないか。記憶には、嘘もあれば歪曲もある。真っことあてにはならない。だが、そこが又良いところであったりもする。面白いものだ。

少しの差で十日町へ行く飯山線に乗り遅れてしまい、止む無く更に隣の越後田沢駅まで歩くことに。50分かかった。何せ鹿渡駅は無人、しかも駅前といっても食堂ひとつない。田沢駅にはアート作品があった。「船の家」、山間なのに船とは意表を突いている。この日は、十日町まで足を延ばし、越後妻有里山現代美術館・キナーレを見学。C・ボルトンスキーの「No Man's Land」というインスタレーションが見所だ。古着の山をクレーンで延々と掴み落とすシーンを見せるという趣向である。

かつての日本一の豪雪地帯の夏は、今やアートの里に変貌していたのだ。

十日町からは、戸狩方面に戻り飯山市で宿をとった。

翌日、^{せいじゆ}正受庵と阿弥陀堂を見に行きたかったからだ。どちらも映画『阿弥陀堂だより』(2002年・監督小泉堯史)に登場した。正受庵は駅から近いので見ることができたが阿弥陀堂はとっても不便なようなので断念した。映画では北林谷栄演ずるおうめ婆さんが守っていたお堂だ。ロケセットだが今も残され、地域の人に守られ多くの人を訪れる名所になっているとか。他日を期したい。

昭和43年(1968)越年スキー行

9月2日、飯山駅から豊野駅経由で信越線黒姫駅に向かった。実は人生で2回目である。学生時代の4年生の正月休み、44年前越年スキー行でこの駅に来ていたはずだ。

ハッキリとした記憶がないのだが、道祖神(第7号)の記録によれば、

昭和43年 12月30日～昭和44年 1月3日 :黒姫山スキー場

CL:I君(3年)、SL:S君(3年)、E君(3年)、K君(3年)、I君(2年)、H嬢(2年)

と、あった。私の名前がない。どうもギリギリで潜り込んだらしい。又、K君はメンバーの記憶によれば不参加だったようだ。

この時のことを、当時のメンバー諸氏の記憶と昔の時刻表を参考に再生してみたい。記録にある日程表によれば、出発日は12/30とある。準急から急行に昇格した夜行列車「きそ8号」に23:55に乗ったのではなからうか？であれば、長野駅に翌日の5:48に到着。長野駅で信越線に乗換え、おそらく大晦日の早朝 6:43 柏原駅へ到着。記録表には柏原駅とあるが、昭和43年10月1日に黒姫駅と改称されている。だからこの時には既に柏原駅ではなかったはずだ。駅からスキー場まで多分歩いたのだろうが、まるで憶えない。

記録によればテントサイトは上桑山とある。ワングルらしくテントでキャンプしながらスキーをするという、無謀な企画だった。少なくとも私とE君は初めてのスキーだった。天候も余り良くなく、悪戦苦闘の初体験だった。その所為かどうか、以来スキーはあまり上達していない。その日ドカ雪が降った。スキー用具は氷ついたままだし、テントも潰れそうになった。ラジオで紅白歌合戦を聴きながら過ごしたはずだが誰が歌っていたか記憶がない(星影のワルツ、天使の誘惑、恋の季節)などがこの年のヒットだが)。それどころかテントの中が酸欠状態となり、ロウソクの火が消えそうになり^{あわ}慌てたことを憶えている。次の日から^{たま}堪らず近くの民宿に駆け込んだ。大雪の為、スキー客のキャンセルがあったので潜り込めたようだ。お金もないから当然素泊まり。軒先の炊事場で寒さに震えながらメシを作った。当時の写真にはでっかいザックを担いでいる姿がある、食材だけは持っていたのだ。元日と二日の日も黒姫山スキー場で滑った、というか雪まみれになった。このスキー場だが、今では「スノーパーク」黒姫高原スキー場と称しているらしい。今では民宿ではなくペンションばかりのようだ。洒落た名前が変わっている。当時、スキー場には確か「シャレー黒姫」というレストハウスがあったが、調べてみたが今はもうない。

「白い恋人たち」という甘美なメロディが辺りに流れていたのが耳に今も残っている。

クロード・ルルーシュという名前も憶えていた。しかし資料によれば、音楽はフランス・レイによるものだ。「白い恋人たち」は1968(昭和43)年のグルノーブルオリンピックをテーマにしたドキュメンタリー的な映画のテーマ曲。監督がクロード・ルルーシュだ。11月9日公開されヒットしたとある。あの記憶はやはり正しかったのだ。

「白い恋人たち」といえば、札幌土産品で有名な「白い恋人」というお菓子がある。よく似ているが、そのネーミングとの間に関係はないのだろうか?と思い調べてみた。

「白い恋人」は、石屋製菓(1947年創業)が札幌オリンピックの年(1976)に発売した。以来ちょっとした事件はあったが今でも抜群の売上を誇る人気商品だ。ネーミングの由来がパッケージに書いてあるそうだ。それによれば、「ある年の師走に、創業者がクロスカントリー帰りに自宅でつぶやいた言葉、“白い恋人たちが降ってきた来たよ、”であると。それを創業者の息子の石水勲が、“たち、を省いて「白い恋人」にしたらどうかと提案したという。この二代目の生まれは1944年、グルノーブルの時は24歳の青年だった。札幌オリンピックの時は32歳、石屋製菓の専務になっていた。青春時代に耳にしたあのメロディが、ヒラメキとなり、大ヒット商品のネーミングとなった。それが、1980年には二代目社長に彼を押し上げた、と思いたいが穿ちすぎであろうか。彼はつまずきもしたが、サッカーのコンサドーレ札幌の立ち上げにも深く関わったことでも知られている。感性が豊かだ。

正月3日長野駅経由、急行「赤倉」で17:30名古屋に帰ったのか。長野駅の待合い室のテレビで野坂昭如が口角泡を飛ばしている映像が流れていた。誰と何を話していたのか?選挙前であったのかと調べてみたのだが、どうも関係なかった。我が家の自室に、若山牧水の詩(幾山河越え...)の木彫額が架けてある。この年次の卒部生への記念品として、この時長野駅前の商店街の民芸品店で後輩達がいちいち求めてくれた品だ。このことをE君は憶えてくれた。額の裏に、昭和43年度卒部記念と記されている。この時、品選びに関わった者として、ひとしお思い出深い品なのだ。今では何人が持っているのだろうか。

この額を抱えて、そのまま追い出しコンパの会場に駆けつけた気がしている。会場はどこだったか?今池の亀屋か?かの玉喜ではなかったと思う。誰か記録を残していないか。

2012年・黒姫駅・長野駅

今回は小林一茶記念館が目的だった。さすがに真夏のスキー場には行ってみなかった。44年前はスキーには関心があったが、一茶には全く関心がなかった。柏原が一茶の故郷とは知っていたはず。当時すでに記念館もあったようだし、旧居である終の住処である土蔵も当然あったのに。長野市では善光寺にお詣りした。無宗派なのだが昔から多くの参詣者を集めてきた不思議なお寺だ。旧長野駅はお寺のようなデザインで趣きがあったような気がしていた。卒部記念のような木彫額が今でも売られているのか確かめたくて民芸品店を覗いてみた。額はあったが、牧水の詩はなく殆ど島崎藤村だった。何時の間にか牧水は人気がなくなっていたのだ。と、感じつつ商店街をブラついていたら、あるお店のショーウィンドウに珍しい写真ポスターが額に入っていた。長野オリンピック(1998)のポスターらしいのだが、そこに昔の長野駅の写真があった。オリンピックに合わせて新幹線が開通

し駅舎も新築されたようだ。それにしても今の駅舎のデザインの何と無粋なことか！善光寺の門前町らしい風情はどこに行ってしまったのか？感性が問われる。進歩と引き換えに失ったものがここにもあった等とブツブツぼやきながら車中の人となり、真夏の追憶行を終えたのだった。

(了)